

ウイルスについて

持続感染ウイルス

不顕性感染か、治療で症状は消えても、細胞に感染し続け、体内から排除するのがほぼ不可能なウイルス

主なウイルス ボルナウイルス サイトメガロウイルス コロナウイルス
リンパ球性脈絡髄膜炎ウイルス、エイズウイルス、白血病ウイルス、エプスタインバーウイルス、B型肝炎ウイルス、C型肝炎ウイルスなど。

エプスタインバーウイルス（EBウイルス）

東京医科歯科大学 血液内科学講師の新井文子先生の解説から

- 1、 人間では、5歳までに50%が不顕性感染、20歳までに90%以上が感染
- 2、 思春期以降の感染では、伝染性単核症といわれる。
多くは治療しなくても治すことができるが、一部は難治性となる。
- 3、 口を通じて感染すると、咽頭粘膜とそこのB細胞に感染、ウイルス粒子を作って増殖するが、免疫細胞に抑えられ、不顕性持続感染となる。
その時B細胞は、巨大化、不死化する。免疫力が低下した時には、増殖するときもあるが、通常は抑えられる。
- 4、 EBウイルスが増殖して、血液中にEBウイルスの遺伝子が存在するときには、EBウイルスはB細胞ではなく、障害性T細胞やNK細胞の中で増殖していて、ほんのちょっとした刺激でリンパ球が活性化し、種々のサイトカインを出し、炎症を引き起こす。治療抵抗性の慢性疾患では、EBウイルス感染を疑う必要がある。
- 5、 障害性T細胞やNK細胞の腫瘍で塊を作らず、化学療法は効かない。造血幹細胞移植が唯一の治療法である。
- 6、 EBウイルスが感染した部位により、ありとあらゆる症状がみられる。

あつべ動物病院の補足説明

それ以外にも、リンパ節で増殖してリンパ腫を作ります。又、種々の癌の原因ウイルスでもあります。

処方水は、動物の免疫力を上げ、EBウイルスが、障害性T細胞やNK細胞の

中ではなく、B細胞の中でだけ持続感染状態を維持させ、症状をおさえるものです。B細胞の中だけでは、サイトカインの放出はありません。

ボルナウイルス サイトメガロウイルス ヘルペスウイルス

ボルナウイルス、サイトメガロウイルス、ヘルペスウイルスは、神経細胞に持続感染するウイルスです。EBウイルス同様に、感染時に一過性に発症するか、慢性神経疾患になるか、不顕性感染となります。動物が元気なうちは、ウイルスの増殖もゆっくりですが、発情、加齢やストレス、疾患などで、免疫力が低下すると、一気に増殖します。種々の神経疾患の原因ウイルスです。

リンパ球性脈絡髄膜炎ウイルス（ウイキペディア）

宿主 げっ歯類、犬、豚、猿、ヒト、猫（PHAで検査したら）

感染 接触 経口感染による

症状 ヒト以外の動物 一般に無症状、実験用マウスへの脳内接種で脈絡髄膜炎を引き起こし死亡した例がある。

アレナウイルス属なので持続感染と考えられます（あつべ動物病院補足）

コロナウイルス、猫エイズウイルス、猫白血病ウイルス、B型肝炎ウイルス、C型肝炎ウイルスも、持続感染する細胞は異なりますが、体内でゆっくりと増殖します。

処方水は、他の持続感染ウイルスでも、一過性の感染ウイルスでも、細菌、真菌、癌、白血病でも、同じように、自分自身の免疫力を上げて抑えていきます。

ウイルスの増殖

ウイルスは細胞の中で増殖します。

細胞の中に入ると、ウイルスは、外側の殻と遺伝子とに分かれます。

殻は殻で、遺伝子は遺伝子で、各々別々に細胞の中で、増殖します。

二つに分かれて増殖している間は、ウイルスとしては存在していません。

ウイルスがいないと判断されます。

別々に増殖していた、殻と遺伝子が合体して、初めてウイルスとして認識されます。

